

地中海世界における聖母晩年伝図像の形成・伝播と機能について

桑原夏子
Natsuko KUWABARA

聖母マリアの晩年とは？それがなぜ重要なのか？

- 431年（エフェソス公会議）、マリアは神の母として認められる
- 聖書に記述のない聖母マリアの最期についての関心が高まる
- 様々な偽書（Apocrypha）が編纂される

現存する9言語63種類の偽書の内容は3パターンに分類できる

- ①聖母の魂だけが被昇天したとするもの
- ②聖母の魂と体が別々に被昇天したとするもの
- ③聖母の魂が体に戻され、肉体ごと被昇天したとするもの

ローマ・カトリック教会が聖母被昇天の教義を上記③として正式に認めたのは1950年、エフェソス公会議から約1500年後のことだった

- ⇒聖母の晩年についての公式見解が定まらないまま、1500年ものあいだ、それぞれの偽書の内容に基づき、聖母の晩年に対する様々な「信仰的真実」が各時代・各地域で形成された
- ⇒聖母の晩年を表した絵画図像の多様化・複雑化を招いた

ローマ・カトリック圏の基本姿勢：肉身被昇天を描く

- ・聖母の魂は体に戻され、8月15日に体ごと被昇天した
 - ・8月15日には肉身被昇天を典礼として祝い、絵画表現も肉身被昇天を前提とする
 - ・全ての義人は、最後の審判時において聖母のように肉体ごと天に入れるはずである
- ⇒聖母の肉身被昇天は、来たる最後の審判の「予型」であると見なされ、13世紀半ば以降は強力に支持された

正教会（ビザンツ）圏の基本姿勢：魂の被昇天を描く

- ・聖母は8月15日に「お眠り」になり、魂が被昇天した
 - ・8月15日は聖母の「就寝祭」を典礼として祝い、大半の絵画表現も魂の被昇天を表す
 - ・しかし有力な神学者は聖母の肉身被昇天を認めた
- ⇒聖母の魂の被昇天のみを祝うが、肉身被昇天を完全否定はせず、そのため人々の考えにかなりの揺れ幅が生じた

プロテスタントの基本姿勢：聖母の晩年は重視しないし、描かない

- ・聖書の記述が全て
- ・したがってマリアを特別視することはせず、聖書に記述のない彼女の晩年のことは重視しないし、絵画化もしない

→ 世界人口の31パーセントを占めるキリスト教徒のあいだで、聖母の晩年のあり方について、ここまで見解が分かれている

上記の事情を踏まえた上での研究アプローチ



ローマ教会圏＝魂と体が共に被昇天



正教圏＝魂だけが被昇天

しかしこの傾向は絶対的な二項対立ではなく、意味の曖昧な図像が1500年の間に大量に生産された

1000点を超える作例データの分析を元に図像の生成と伝播、各地における受容のあり方を探った研究成果は、単著として12月8日出版出来、12月25日出版！

目次

序章

第I部 図像の生成と地中海圏

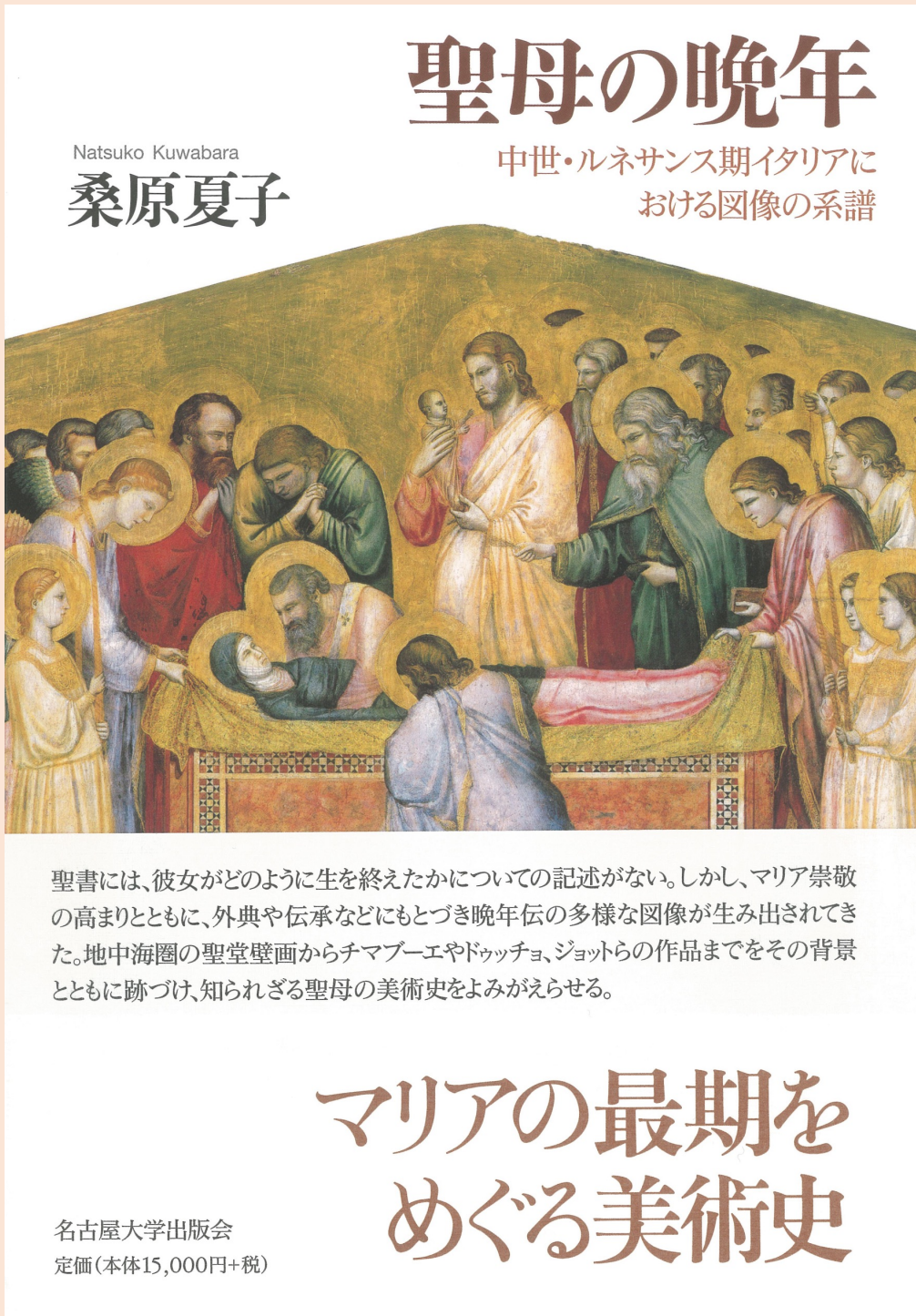
- 第1章 聖母の晩年にまつわる最初期の作例群
- 第2章 聖母晩年伝表象に対する躊躇と欲求
- 第3章 13世紀末イタリアにおける聖母晩年伝の開花

第II部 ドウッチョとジョットによる刷新

- 第4章 シエナ
- 第5章 ジョットの衝撃

第III部 図像の機能の樹形図

- 第6章 震源地ローマ
 - 第7章 聖なる空間と政治的空間における機能
- 終章



- ・偽書の内容を分類、その分布図をマッピング
- ・現地にて1000点を超える絵画作例データを収集
- ・絵画作品の注文主、鑑賞者、制作年、どの位置でどのような装飾と共に見られたかをデータベース化
- ・偽書の内容と絵画の対応関係の調査

- ⇒図像成立の綾を解き明かす
- ⇒どのような理由で聖母晩年伝表象が各地で受容されたのかを明らかにする